MESSIAH

the Greatest Sermon Ever Sung

メサイア

史上最高の希望の歌

作　　トニー・ピッテンジャー
絵　　ジョナサン・メイヤー
翻訳　MLP JAPAN（多言語文書委員会）

目次

第Ⅰ部

1. 序曲/シンフォニア 7
2. 慰めよ、わたしの民を 8
3. すべての谷は埋め立てられ 9
4. このようにして、主の栄光が現わされると 9
5. まことに、万軍の主はこう仰せられる 10
6. あなたがたが尋ね求めている主 11
7. だれが、この方の来られる日に耐えられよう 11
8. レビの子らをきよめ 12
9. 見よ。処女がみごもっている 13
10. 良い知らせを伝える者よ 13
11. 見よ。やみが地をおおい 14
12. やみの中を歩んでいた民は 15
13. 私たちのために 16
14. 田園交響曲 17
15. 羊飼いたちが 18
16. すると、主の使いが 18
17. 御使いは彼らに言った 19
18. すると、たちまち 19
19. 栄光が、神にあるように 19
20. 大いに喜べ 20
21. そのとき、目の見えない者の目は開き 21
22. 主は羊飼いのように、その群れを飼い 21
23. 彼のくびきは負いやすく 22

第Ⅱ部

24. 見よ、世の罪を取り除く神の小羊 23
25. 彼はさげすまれ、人々からのけ者にされ 23
26. まことに、彼は私たちの病を負い 24
27. 私たちはみな、羊のようにさまよい 25
28. 彼を見る者はみな、彼をあざけります 26
29. 主に身を任せよ 26

30.　そしりが彼の心を打ち砕き ····· 27
31.　よく見よ、彼をひどいめに会わされたこのような痛みを····· 27
32.　生ける者の地から絶たれたことを ····· 28
33.　あなたは、彼のたましいをよみに捨ておかず ····· 28
34.　門よ、おまえたちのかしらを上げよ ····· 29
35.　神は、かつてどの御使いに向かって ····· 29
36.　神の御使いはみな、彼を拝め ····· 30
37.　あなたは、いと高き所に上り、捕われた者をとりこにし····· 30
38.　主はみことばを賜わる ····· 31
39.　良いことの知らせを伝える人々の足は、なんとりっぱでしょう····· 32
40.　その声は全地に響き渡り ····· 32
41.　なぜ国々は騒ぎ立ち ····· 33
42.　彼らのかせを打ち砕き ····· 34
43.　天の御座に着いておられる方は笑う ····· 34
44.　あなたは鉄の杖で彼らを打ち砕き ····· 34
45.　ハレルヤ····· 35

第Ⅲ部

46.　私は知っている。私を贖う方は生きておられ ····· 37
47.　死がひとりの人を通して来たように ····· 38
48.　私はあなたがたに奥義を告げましょう ····· 39
49.　終わりのラッパとともに ····· 40
50.　みことばが実現します ····· 40
51.　死よ、おまえのとげはどこにあるのか ····· 41
52.　しかし、神に感謝すべきです ····· 41
53.　神が私たちの味方であるなら ····· 42
54.　ほふられた小羊は ····· 42
55.　アーメン····· 43

メサイア　－史上最高の希望の歌－

文　　© 2012 アンソニー・ピッテンジャー　Anthony(Tony) Pittenger
挿絵　© 2012 ジョナサン・メイヤー Jonathan Mayer

All rights reserved. Printed in the U.S.A.
www.facebook.com/MessiahBook
BRIO 出版
12 South Sixth Street ＃1250
Minniapolis, MN 55402

前書き

『メサイア』と私の恋は偶然に始まりました。大学生の時、私は勉強の邪魔にならないバック・ミュージックを探していました。

私は『メサイア』の CD を買い、それを聴きながら宿題に集中しようとしましたが、残念ながらうまくいきませんでした。教会で洗礼と教育を受けてキリスト教の信仰を持っていた私は、この歌の中に自分の救いを聞いたのです。こうして『メサイア』と私の 20 数年にも渡る恋物語が始まりました。

私の恋心が膨らむにつれ、この曲を他の人に伝えたいという想いがつのっていきました。この本は、ヘンデルの『メサイア』の中で歌われている救いの約束の物語を皆さんと分かち合うささやかな試みなのです。

この本を次の人たちへ捧げます。

まず私の母ナンシーへ
私の幼少期に『メサイア』のレコードをかけてくれたことで、『メサイア』に対する愛の種を蒔いてくれました。それはやがて根を張り、成長し、花を咲かせました。

私の子どもたちカラリーナ、マイカ、ジャック、ニカへ
あなたたちが、天におられる御父（みちち）と御子（みこ）のことをより良く知ることができるよう、神が恵み深く私を用いてくださいますように。いつも素直な子どもらしい信仰で私を感動させてくれてありがとう。

最後に私の妻メリッサへ
あなたは私たちが『メサイア』の本やコンサートのチケットを買えない時にも、『メサイア』に対する私の狂おしい愛を広い心で励ましてくれました。メリッサ、救い主へのあなたの愛は周りの人たちを明るく照らしています。神がこの本を同じように用いてくださいますように。

私はのんびりと学生生活を送りましたが、その後、私の身の回りや世の中では多くの出来事がありました。祖国はテロリストによって攻撃され、多くの友人や家族がそれに対抗するために立ち上がりました。また大学と神学校時代の好景気は一変し、私の世代が今まで体験したことのない不況に陥りました。私自身も、子ども、義理の父、祖父母、そして多くの親しい友人との死別を経験しました。

私はこうした出来事の度に、無意識に『メサイア』に立ち返りました。ヘンデルの音楽と一体化した聖書の言葉は弱っていた私を強め、恐怖に陥っていた私を慰めてくれました。『メサイア』が明らかにしている希望のメッセージは数々の涙を乾かし、私のために天国に用意されている住まいを熱望するよう導いてくれました。そこで私は天使たちと天国に住む人々と共に、完璧なハーモニーで歌うことができるのです。

「御座にすわる方と、小羊とに、賛美と誉れと栄光と力が永遠にあるように。」

ソリ・デオ・グロリア（*Soli Deo Gloria* ただ神にのみ栄光）
アンソニー・ピッテンジャー

挿絵画家より

これほど広く知られ愛されている名曲についての挿絵を描くというおそれ多い依頼を受けた時、私は自分なりのガイドラインを作ることにしました。最初に決めた最も重要なことは、キリストを中心にするということです。これはヘンデルの目標でもありました。ヘンデルの音楽に敬意を表す一番良い方法は、音楽そのものではなく、それが明らかにしている救い主を強調することだと感じたのです。

もう一つの目標は、私たちの救い主の業を描写し続けてきた、私よりもはるかに優れた才能と恵みを受け継いでいるキリスト教美術の歴史の流れを汲むことでした。世の中には多くのクリスチャンの芸術家がいてペンや絵筆などを使って神聖な真理をとらえようとしています。私もその中の一人に過ぎません。ですから他のクリスチャンアーティストの多大な功績を軽んじることは考えられません。ここで描いた挿絵は、受け継がれ

る伝統に対する私のささやかな貢献の一つです。

すぐにお分かりになると思いますが、ヘンデルは『メサイア』の中でイエスがお話しになる場面を設けませんでした。その謙虚な姿勢にならって、私も「人間であるイエス」の顔を描きませんでした。これは、私たちが天国に行き、天使たちと共にイエスの側にいられる日までは、肉体的な目でイエスを見ることができないからです。信仰の目によってのみ見ることができるのです。

この本と挿絵が、ヘンデルの傑作をよりよく鑑賞するために役立つだけでなく、キリストが私たちに与えてくださった素晴らしい愛を、より深く理解させてくれる手助けになることを願っています。

ソリ・デオ・グロリア(Soli Deo Gloria　ただ神にのみ栄光)
ジョナサン・P・メイヤー

はじめに

この聖書研究の目的は、愛に満ちておられる天の父と子と聖霊の御名に栄光を表すことです。これは、チャールズ・ジェネンズが聖句を選び、ジョージ・F・ヘンデルが一つの音楽作品としてつなぎ合わせることによって具体化しています。最初から最後まで『メサイア』は、聖句にそった神学理論に基づいて、堕落した人間に対する神の愛を最も美しい形で私たちに伝えています。

これから『メサイア』を学ぶにあたり確認事項をいくつか挙げておきます。

1. 歌詞・台本(リブレット)の著者はチャールズ・ジェネンズ(Charles Jennens)です。

2. 作曲者はジョージ・フレデリック・ヘンデル(George Frederick Handel)です。

3.『メサイア』は教会向けの作品としてではなく、一般聴衆のために作られ、1742 年 4 月 13 日にアイルランドのダブリンで初演されました。

4. 一般聴衆に向けて作られたため、作詞家が意図的に聖書の言い回しを変更した箇所があります。ジェネンズは英国国教会派、ヘンデルはルター派の敬虔なクリスチャンでしたが、神学理論やキリスト教の教義をそのまま作品にするつもりはありませんでした。あくまでも、その理論や教義を自分たちの芸術的才能を通して表現しようとしたのです。

5. しかしそれは、二人が聖句の意味や神学的な内容を変更したということではありません。多くの場合、その変更はとても微々たるもので作詞家の目的に合わせたものです。例えば「すべて、疲れた人、重荷を負っている人は、**わたし**のところに来なさい。**わたし**があなたがたを休ませてあげます」(マタイの福音書11章28節)は、「すべて、疲れた人、重荷を負っている人は、**彼**のところに行きなさい。**彼**があなたがたを休ませてくださいます」といったように人称が変えられています。
（訳者注:聖句の中で人称が変更されている部分は**太字**にしています。）

6. ジェネンズはほとんどの聖句を欽定訳聖書(KJV)から引用しています。読者のみなさんも参照できるように聖書の引用箇所を記載しました。ただし詩篇だけは、教会に通うほとんどのイギリス人が慣れ親しんでいた英国国教会の祈祷書の中で使われる訳を使用しています。

形式について

1. ここから先のページでは、オラトリオの歌詞と聖書の引用箇所が、黒い四角の枠の中に金色の文字で書かれています。これが実際に歌われている歌詞です。残りの内容は、私の意見や考察、また解説となります。オラトリオの流れを保ち、理解をより深めるために、解説の英語の聖句はすべて欽定訳聖書から引用しています(訳者注：日本語の聖句は新改訳聖書を引用しています)。

2. この聖書研究書を書くにあたって私が利用した音源は、オックスフォード・キリスト教会大聖堂聖歌隊(Choir of Christ Church Cathedral, Oxford) によるものと、クリストファー・ホッグウッド(Christpher Hogwood)の指揮によるエンシェント室内管弦楽団(Academy of Ancient Music)のもの、そしてイギリスで 1991 年に発売されたデッカ・レコード社(Decca Record Company)のオワゾリール版(Líoiseau-Lyre edition)です。

聖書研究について

1. 『メサイア』の美しさは、神学と音楽との融合にあります。ですから、できるだけ音楽そのものが語りかけてくるものを大切にしてください。解説はなるべく曲が流れている間に読み、途中で曲を止めるのは最小限にしておきましょう。

2. 心苦しいのですが、時間節約のために作品を短縮する必要が出てくるかもしれませ

ん。ほとんどの音楽店で『メサイア』のハイライト版が売られていますが、それが必ずしも音楽的または神学的なハイライトとは限りません。単に人気の高いものの寄せ集めである場合があります。例えば、多くのハイライト版は「ハレルヤ」コーラスの直後で終わります。つまり第Ⅲ部がそっくり抜けているのです。オラトリオ全体は全てを聴くと２時間以上かかります。『メサイア』を聖書研究用に使う時、もし全てを聴くことができない場合は自分なりの抜粋版を用意することを考えてみてください。そうすれば、神学的なハイライトを自由に入れることができるでしょう。

3. 『メサイア』に含まれた神学を完全に理解するには、何年もかかるかもしれません。聖書研究会の参加者には『メサイア』のハイライトだけではなく、全曲が入っている音源を準備し、自宅で曲を聴くときの手引きとして本書を使うよう薦めてください。

第Ⅰ部

1.　序曲/シンフォニア

ヘンデルの『メサイア』は悲しく陰気な音色で始まります。この暗さは不信仰の者、暴力の被害者、そして腐敗と死に縛られている私たち全人類のことを表しています。
最近のニュースに目を向けてください。肉親に虐待される子ども、事故や犯罪、自然災害や戦争。このような罪の暗い結果を、あなた自身も体験したことがあるはずです。誰かがあなたに対して犯した罪、そして自分自身の罪に対して感じた罪悪感や恥などです。あるいは、病気や身近な人の死などかもしれません。

暗い音色は途中で一変します。まるで地平線の向こうに希望が見えるかのように、そして誰かがこの苦しみを解決してくれるかのようにメロディーが明るくなります。この誰かとはまさしく、ヘブル語で「メシア（英語読みでメサイア）」と呼ばれる方のことを指しています。

「メシア」とは「油注がれた者」、もしくは「選ばれた者」という意味です。これは、人類の救い主として神が遣わすと約束された方についての、旧約聖書的な言い方です。「メシア」は、神の約束として古くから受け継がれてきた希望を表しています。

教会における説教の役割は、神の御言葉（みことば）の真理を宣べ伝えることにあります。ヘンデルは、聖句に含まれる救いの真理を音楽と歌で表現することにより、史上最高の説教をしたのです。

2.　慰めよ、わたしの民を

イザヤ書40章1-3節「『慰めよ。慰めよ。わたしの民を』とあなたがたの神は仰せられる。『エルサレムに優しく語りかけよ。これに呼びかけよ。その労苦は終わり、その咎は償われた。そのすべての罪に引き替え、二倍のものを主の手から受けたと。』荒野に呼ばわる者の声がする。『主の道を整えよ。荒地で、私たちの神のために、大路を平らにせよ。』」
Isaiah 40:1-3 Comfort ye, comfort ye my people, saith your God. Speak ye comfortably to Jerusalem,and cry unto her, that her warfare is accomplished, that her iniquity is pardoned. The voice of him that crieth in the wilderness, Prepare ye the way of the LORD, make straight in the desert a highway for our God.

イザヤは、イスラエル王国がアッシリア帝国に滅ぼされた時代(紀元前 722 年)に生きた人で、神の言葉を伝える預言者でした。アッシリアがさらに南のユダ王国に進軍した時、ユダの町が破壊されました。ユダがアッシリアに降伏し属国となろうとしている時に、イザヤは人々に対して初めて語りかけました。アッシリア軍がエルサレムを包囲している中で、神はイザヤを通してユダの救いと慰めを約束されました。この預言は、その後、ペルシャ帝国の王クロス(キュロスと表記されることもあります)Ⅱ世によってユダの人々が解放され、祖国を再建したことで成就されました。

現実には、敵国によって征服され捕らえられるよりも、もっと悪い事が存在します。さらに言えば、神の民がクロス王に救われたことよりもっと素晴らしい救いが存在します。私たちは罪、悲しみ、心の痛み、恐れ、心配、暴力、流血、戦争、死などから逃れることができません。悪魔に征服された状態の私たちは誰もが罪の支配下にあり、神の目から見て有罪であると聖書ははっきり伝えています。

一方で、イザヤは偉大な救いについて語っています。それは、罪の責任と結果からの救いです。新約聖書が書かれた時代(紀元 1 世紀)の預言者である洗礼者ヨハネの言葉は、イザヤ書 40 章の意味をより深く説明してくれます。ヨハネは主の道を準備するために神に選ばれました。彼は、罪と死と地獄からの神の救いの約束を宣言しました。つまり、神の約束された救い主の到来を宣言したのです。

序曲で聞いた暗い音色とここの旋律との違いに注目してください。こちらは序曲に比べ静かで心休まる曲調です。「慰めよ、わたしの民を」は、朝焼けの空が、新たな一日という希望の色で優しく満たされていくようです。さらに「成し遂げられた(accomplished)」、「赦(ゆる)された(pardoned)」という言葉は最終宣告のように歌われています。この

物語は始まったばかりなのに、もう結末が知らされています。私たちの救いは成し遂げられ、罪は赦され、救いの御業（みわざ）は完了するのです。

3.　すべての谷は埋め立てられ

イザヤ書 40 章 4 節「すべての谷は埋め立てられ、すべての山や丘は低くなる。盛り上がった地は平地に、険しい地は平野となる。」 *Isaiah 40:4 Every valley shall be exalted, and every mountain and hill made low: the crooked straight, and the rough places plain.*

この部分で使われる低音は、聴く者を谷底へと導いていきます。やがて、神の愛の光に満ちた高みに引き上げられるのが聴こえてきます。そして高い音によって山を越えたかと思うと、また低い所に降りていきます。ソリスト(独唱者)が「crooked (盛り上がった/曲がりくねった)」と歌うと曲がって聴こえ、「straight(平ら/真っ直ぐ)」と歌うと言葉通り真っ直ぐに聴こえてくるのです。ヘンデルは、あたかも画家が絵の具と筆を操るように、思いのままに音を操っています。

この歌は約束された救い主についての歌です。救い主が来られる時、人間の傲慢、山のように高くなったプライド、めまいがする程の自己義認など、そびえ立つ山々はすべて救い主の前で低くされます。イエスは「なぜなら、だれでも自分を高くする者は低くされ」とルカの福音書 14 章 11 節で言っておられます。主の前で、人間は自分の方が神よりも優れているなどとは言うことができません。私たちはへりくだって、自分の罪を告白するしかないのです。

イエスはさらに続けておられます。自分を低くする者は高くされるからです」(ルカ 14 章 11 節)。これは、救い主が罪を深く悔やんでいる者を抱き上げて、力強くも温かい神の愛の光の中に置いてくださるという意味です。

4.　このようにして、主の栄光が現わされると

イザヤ書40章5節「このようにして、主の栄光が現わされると、すべての者が共にこれを見る。主の口が語られたからだ。」 *Isaiah 40:5 And the glory of the LORD shall be revealed, and all flesh shall see it together: for the mouth of the LORD hath spoken it.*

『メサイア』のほとんどの演奏や録音では、ここで初めて合唱が登場します。オラトリ

オ全体を通して、合唱には特に注目してください。

合唱はほとんどの場合、一般の人々を表しています。つまり合唱は、私たちの声を代弁しているのです。神は全ての人間の前で神の栄光が現われることを約束されています。ヘンデルは合唱の中で、様々な場面を様々な声で表現することによって、その約束を強調しています。演奏を実際に聴くとソプラノ、アルト、テノール、バスの各パートが細かく分けられていることでその効果を実感することができます。

この部分は、色々なパートに分かれて歌われています。これは「その後、私は見た。見よ。あらゆる国民、部族、民族、国語のうちから、だれにも数えきれぬほどの大ぜいの群衆が、白い衣を着、しゅろの枝を手に持って、御座と小羊との前に立っていた」という黙示録 7 章 9 節の内容を表しています。「全ての肉(All flesh)」とは、今の地球に生きる全人類という意味だけでなく、すべての時代に存在する人間を指しています。

救い主が預言通りお生まれになったので、ガラテヤ人への手紙 3 章 28 節に書かれているように「ユダヤ人もギリシヤ人もなく、奴隷も自由人もなく、男子も女子もありません。なぜなら、あなたがたはみな、キリスト・イエスにあって、一つだからです」ということになります。ヘンデルは「主の御口がそれを告げたので(for the mouth of the Lord has spoken it)」というフレーズでそのことを強調しています。

5.　まことに、万軍の主はこう仰せられる

ハガイ書2章6-7節「まことに、万軍の主はこう仰せられる。しばらくして、もう一度、わたしは天と地と、海と陸とを揺り動かす。わたしは、すべての国々を揺り動かす。すべての国々の宝物がもたらされ、わたしはこの宮を栄光で満たす。万軍の主は仰せられる。」
Haggai 2:6-7 Thus saith the LORD of hosts: Yet once a little while, and I will shake the heavens, and the earth, the sea, and the dry land; And I will shake all nations, and the desire of the nations shall come.

預言者ハガイはバビロン捕囚の後、故郷に戻った神の民に仕えました。ユダヤの歴史では、しばしばこの時期を「復興の時」と呼んでいます。こうした聖書の史実がこの預言者の存在を重要なものにしています。ジェネンズとヘンデルは、これからやってくる神が約束した復興について、私たちに伝えているのです。

「万軍の主はこう仰せられる」は、強い権威に満ちています。「揺れる(shake)」という言

葉が文字通り揺れ動くのを聴いてみましょう。そして、「国民の望み(the desire of the nations)」のフレーズが始まると、音楽はより温かく、柔らかく、そして優しくなります。全ての人が本当に必要とするのは「救い主」です。救い主は「全ての人(all flesh)」が求めるべきであるのに、実際には多くの場合、必ずしも全ての国、全ての人が求めるとは限らないものなのです。

この救い主は、ユダヤ人たちが求めていたような政治的な救い主ではありませんでした。また、私たちが望み求めるものとも違った救い主のように思えます。その人は私たちの罪について語り、罪に背を向け、罪を捨て去るよう私たちに勧めておられます。人間の罪深い性質は、罪を見過ごし、都合よくゆるしてくれるような救い主を求めます。それはこの世での生活が、より快適になるよう力を発揮してくれるような救い主です。聖句は、神の遣わす救い主がそれと全く違っていることを教えています。なんと目の覚めるような言葉でしょう。

6.　あなたがたが尋ね求めている主

マラキ書 3 章 1 節「『見よ。わたしは、わたしの使者を遣わす。彼はわたしの前に道を整える。あなたがたが尋ね求めている主が、突然、その神殿に来る。あなたがたが望んでいる契約の使者が、見よ、来ている。』と万軍の主は仰せられる。」
Malachi 3:1 The Lord, whom ye seek, shall suddenly come to his temple,even the messenger of the covenant, whom ye delight in: behold, he shall come, saith the LORD of hosts.

マラキは神のご計画について、その詳細を交えながら預言し始めます。主ご自身が、「突然その神殿に来られる(suddenly come to his temple)」のです。預言通りにイエスは予期せぬ時に来られました。イエスはこの時と同じようにこの世に再び来られると約束されています。

この節とそれに続く二つの節は、罪を憎みながらも罪人一人ひとりを愛されるという、神の偉大な矛盾について教えています。この矛盾ゆえに、実に驚くべき事を成し遂げようと救い主が動かれるのです。

7.　だれが、この方の来られる日に耐えられよう

マラキ書 3 章 2 節「だれが、この方の来られる日に耐えられよう。だれが、こ

の方の現われるとき立っていられよう。まことに、この方は、精練する者の火、布をさらす者の灰汁のようだ。」
Malachi 3:2 But who may abide the day of his coming? and who shall stand when he appeareth? for he is like a refiner’s fire.

「全ての国の望み(the desire of all nations)」が来られる時、誰がその御前（みまえ）に立つことができるでしょう。その方は聖（きよ）い方ですが、私たちはそうではありません。私たちは、このままでは神の御座（みざ）に近づくことはできません。アダムとエバは、罪を告白する機会を与えられたにも関わらず、怖くなって神の御前から身を隠してしまいました(創世記 3 章を参照)。

神の律法には誤りがありません。しかしこの完璧な基準は、人間が罪を犯して以来私たちが決して手に入れられないものになってしまいました。神がイスラエル人をシナイ山のふもとに呼び寄せられた時、恐ろしいほどの神々しさのため、神が直接彼らに向かってお話しにならないようにと人々は願いました。イスラエル人は、神に代わって語りかけてくれる人物(預言者)を与えてくださるように神に願いました(申命記 18 章を参照)。

マラキが投げかける質問は、罪人の良心を目覚めさせる、熱い棒のようなものです。「彼は精練する者の火のようだ(He is like a refiner’s fire)」と私たちは教えられます。神は、約束されたメシアによって、金や銀に含まれる不純物を取り除くように、私たちの全ての罪を取り除かれます。一体、「だれが、この方の来られる日に耐えられ」るでしょうか。自分自身の力では誰ひとりとして生き残れる者はいません。感謝すべきことに、人間はこの質問の答えを用意する必要はありません。シナイ山のふもとで、神はイスラエルの民に預言者をおくるということを約束されています。マラキ書 3 章 3 節も同じことを伝えています。

8. レビの子らをきよめ

マラキ書 3 章 3 節「この方は、銀を精練し、これをきよめる者として座に着き、レビの子らをきよめ、彼らを金のように、銀のように純粋にする。彼らは、主に、義のささげ物をささげる者となり」
Malachi 3:3 And he shall purify the sons of Levi, that they may offer unto the LORD an offering in righteousness.

合唱から、私たちはもう一度マラキ書 3 章 2 節の答えを聞くことになります。罪深い人類はどのようにして聖なる神の御前に立つことができるのでしょうか。その答えは、「神

がきよめてくださる」ということです。合唱では、神によって約束された救い主こそが、私たちが神の御前に出ることをゆるし、神が共に居てくださるという思いのもと声を合わせます。救い主を信じること以外に、私たちの捧げ物、つまり私たちの人生が神の目に義と認められる道はありません。

ヨハネの手紙第一１章７節「しかし、もし神が光の中におられるように、私たちも光の中を歩んでいるなら、私たちは互いに交わりを保ち、御子イエスの血はすべての罪から私たちをきよめます。」

ローマ人への手紙３章 23－24 節「すべての人は、罪を犯したので、神からの栄誉を受けることができず、ただ、神の恵みにより、キリスト・イエスによる贖いのゆえに、価なしに義と認められるのです。」

9.　見よ。処女がみごもっている

イザヤ書７章 14 節「それゆえ、主みずから、あなたがたに一つのしるしを与えられる。見よ。処女がみごもっている。そして男の子を産み、その名を『インマヌエル』と名づける。」
Isaiah 7:14 Behold, a virgin shall conceive, and bear a son, and shall call his name Immanuel: God with us.

『メサイア』は、マラキ書３章２節の質問に対する漠然とした答えから、より具体的な答えの内容へと移行していきます。音楽は子守唄のような優しくてやわらかい音色になります。実際のところ、神の救いのご計画は幼子誕生という形で実現するのです。

この短い部分は、メシアについての二つの重要な情報を明らかにしています。それは処女から生まれること、そしてその名前は「インマヌエル（神が共におられる）*God with us*」と呼ばれるということです。

10.　良い知らせを伝える者よ

イザヤ書 40 章９節「シオンに良い知らせを伝える者よ。高い山に登れ。エルサレムに良い知らせを伝える者よ。力の限り声をあげよ。声をあげよ。恐れるな。ユダの町々に言え。『見よ。あなたがたの神を。』」
Isaiah 40:9 O thou that tellest good tidings to Zion, get thee up into the high mountain; O thou that tellest good tidings to Jerusalem, lift up thy

voice with strength; lift it up, be not afraid; say unto the cities of Judah, Behold your God!

神の到来が告げられると、「be not afraid(恐れるな)」という優しくやわらかい声に引きつけられます。神は来られると約束してくださいました。「Behold your God(あなたがたの神を見よ)」というフレーズが何度も繰り返されます。誰一人としてそれを決して疑うことがないように。優しくやわらかい声にもかかわらず、そこには切羽詰った響きがあります。ソリストは、天使たちに対して「ぐずぐずするな、ためらうな。神に属する人々に処女から産まれた子こそが神なのだ、と伝えなさい」と励ましているのです。

イザヤ書60章1節「起きよ。光を放て。あなたの光が来て、主の栄光があなたの上に輝いているからだ。」
Isaiah 60:1 O thou that tellest good tidings to Zion, arise, shine; for thy light is come, and the glory of the LORD is risen upon thee.

多くの演奏の場合、ソリストはイザヤ書40章9節とイザヤ書60章1節の両方を歌い、その後に合唱が繰り返します。合唱が加わる時、彼らは自分を抑えられないかのように歌います。ありとあらゆるところから声が聞こえてくるのは、子どもが嬉しいニュースを伝えたくて黙っていられず、人の会話に割り込んでくるようなものです。この合唱はいったい誰の声なのでしょうか。それは、かつて恥と絶望に打ちひしがれていた神に属する人々の声です。神ご自身がそんな彼らを救い上げてくださいます。この合唱は教会、つまり間もなく訪れる神の降臨を喜ぶ聖徒たちの声なのです。

11.　見よ。やみが地をおおい

イザヤ書60章2-3節「見よ。やみが地をおおい、暗やみが諸国の民をおおっている。しかし、あなたの上には主が輝き、その栄光があなたの上に現われる。国々はあなたの光のうちに歩み、王たちはあなたの輝きに照らされて歩む。」
Isaiah 60:2-3 For, behold, darkness shall cover the earth, and gross darkness the people: but the LORD shall arise upon thee, and his glory shall be seen upon thee. And the Gentiles shall come to thy light, and kings to the brightness of thy rising.

ここでまた、神のいない世界について描写されます。罪によってもたらされた暗闇が地上を覆うのです。「Gross darkness(暗やみ)」という表現が音楽から聞き取れます。波のような表現で演奏され、歌われることによってそれがよく感じられます。しかし光が

人々の上を照らし、つまり主の降臨が近づくにつれ、音楽はより広がりを見せます。その音が地上の隅々にまで響き渡るかのようです。朝日が昇り、闇を追い払うのを止められないのと同様、神の愛とその恵みが広がるのを私たちは止めることができません。「この方にいのちがあった。このいのちは人の光であった。光はやみの中に輝いている。やみはこれに打ち勝たなかった」(ヨハネの福音書 1 章 4-5 節)。

ここで使徒マタイが伝えている博士たちについて触れておくべきでしょう。彼らはエルサレムにやってきてこのように尋ねました。「『ユダヤ人の王としてお生まれになった方はどこにおいでになりますか。私たちは、東のほうでその方の星を見たので、拝みにまいりました。』そしてその家に入って、母マリヤとともにおられる幼子を見、ひれ伏して拝んだ。そして、宝の箱をあけて、黄金、乳香、没薬を贈り物としてささげた」(マタイの福音書 2 章 2、11 節)。

どうして、三人の博士は東方の国から、はるばるユダヤ人の王を探す旅に出かけたのでしょう。彼らが見た星とは何だったのか、また彼らがなぜユダヤの王が生まれたと確信してこのような行動に出たのか、私たちにはわかりません。民数記にはこのように書かれています。「私は見る。しかし今ではない。私は見つめる。しかし間近ではない。ヤコブから一つの星が上り、イスラエルから一本の杖が起こり、モアブのこめかみと、すべての騒ぎ立つ者の脳天を打ち砕く」(民数記 24 章 17 節)。

この節は、一つの星とイスラエルの王を結びつけていますが、博士たちがなぜ空で起こった現象がキリストの誕生のしるしだと分かったのか、はっきりとは教えていません。私たちに分かることは、神が異邦人を救い主に導いたということだけです。

12.　やみの中を歩んでいた民は

イザヤ書 9 章 2 節「やみの中を歩んでいた民は、大きな光を見た。死の陰の地に住んでいた者たちの上に光が照った。」
Isaiah 9:2 The people that walked in darkness have seen a great light: they that dwell in the land of the shadow of death, upon them hath the light shined.

聖書は光の創造で始まり、全ての信者が「世の光」と永遠に結ばれることを伝えて終わります。これは驚くべきことです。自ら闇を選び、つまずきながらさまよっていた人間に、神の方から近づいて来てくださったのですから。

暗闇は神への反逆によって人の世にもたらされました。つまり、アダムとエバが禁断の木の実を食べたことによってです。サタンが知識をもたらすと約束したものは、罪と死という暗闇をもたらしただけでした。「死(Death)」が全人類にどのようにもたらされたかということを私たちに思い出させるため、死という言葉が長々と歌われている点に注目してください。ローマ人への手紙 5 章 12 節にはこう書かれています。「そういうわけで、ちょうどひとりの人によって罪が世界に入り、罪によって死が入り、こうして死が全人類に広がったのと同様に、…それというのも全人類が罪を犯したからです」。

揺れるリズムによって、暗闇の中で道に迷っている人間が、確かなものを探っている様子が表現されています。すると、彼の足下に固い土台が現れ、光が上から照らすのです。

光が差し始める様子が圧倒的な権威にあふれて歌われます。光は神から生まれ、闇を追い払います。少し前までは永遠に続くかと思えた死という言葉の響きは突然消え失せ、完全に勝利に飲み込まれるのです。

13.　私たちのために

イザヤ書 9 章 6 節「ひとりのみどりごが、私たちのために生まれる。ひとりの男の子が、私たちに与えられる。主権はその肩にあり、その名は「不思議な助言者、力ある神、永遠の父、平和の君」と呼ばれる。」
Isaiah 9:6 For unto us a child is born, unto us a son is given: and the government shall be upon his shoulder: and his name shall be called Wonderful, Counsellor, The mighty God, The everlasting Father, The Prince of Peace.

ここでの合唱の加わり方に注目してください。はじめは小さな声で歌っています。そしていよいよ救い主の御名を歌い上げる時には、喜びを抑えることができません。神の御名が次のように叫ばれます。

素晴らしい助言者(Wonderful Counselor)
神の御子は、私たちに助言を与え、指揮し、教えます。この方は、憐れみと赦しによって人々を導くのです。

偉大な神(Mighty God)
神のひとり子は、すでに私たちが聴いてきたように、人間には不可能に思える約束を成就するために、神に属する聖なる権威を用いることができます。

永遠の父(Everlasting Father)
幼子は、永遠なる神であられる天の父と同等であると約束されています。

平和の君(Prince of Peace)
この天の君は、人々の罪の赦しを得るために、ご自分の天の御座(みざ)と引き替えに十字架にかかるという神聖な仲介をしてくださいました。

これは、メサイアの中でも最も人々の印象に残る部分の一つだと言われています。この中で音楽と歌詞が一緒になることで、聴く者の耳に生涯残るような効果を生み出しています。

この部分は人を惹きつけますが、誤解を招くきっかけにもなりました。ある聖書の箇所がヘンデルの音楽のせいで、間違って理解されるようになったのです。ヘブル語ではこの幼子を 4 通りの描写ではっきりと説明しています。

素晴らしい助言者　(Wonderful Counselor)
偉大な神　(Mighty God)
永遠の父　(Everlasting Father)
平和の君　(Prince of Peace)

しかし、英語では「素晴らしい(Wonderful)」と「助言者(Counselor)」の間に、間を置くことが多いのではないでしょうか。言語学的に言えば、これは二語を合わせて一つの意味となります。「偉大な(Mighty)」と「神(God)」が「偉大な神」という一つの意味をなすのと同様です。ヘンデルの『メサイア』がこうした間違いを世間に広めてしまいました。ヘンデルによって 1742 年以来、英語を話すクリスチャンたちの間に混乱がもたらされたのは事実です。しかし、二つの単語の間に間を置いてしまったヘンデルを、許してあげようではありませんか。

14.　田園交響曲

ここまで、私たちは罪と不信仰を課題にした曲を聴いてきました。神がこの問題をどのように解決するかを計画し、実行されるのかという説明です。それはまるで、教室で授業を受けているかのようでした。

この田園交響曲は、教室から現実世界へと移動させるような、ミュージカルで言うところの場面転換の役割を担っています。その現実世界で、私たちは神の約束が実現するのを聴くことになります。

ジェネンズとヘンデルは聴衆を、ヨセフとマリヤが宿屋を見つけられなかったベツレヘムの町から少し離れた羊と羊飼いのいるなだらかな丘へと導きます。

15.　羊飼いたちが

ルカの福音書2章8節「さて、この土地に、羊飼いたちが、野宿で夜番をしながら羊の群れを見守っていた。」
Luke 2:8 There were shepherds abiding in the field, keeping watch over their flock by night.

まるで頭上に浮かんで彼らを見守っているかのように、輝かしい単音が羊飼いについて告げ知らせています。高音から低音に移っていくのを聴きながら、寝静まった町に下りていく様子を想像してみましょう。そこにいる人々は、これからどんなに素晴らしい知らせを聞くことになるのか、まだ何も知らないのです。

16.　すると、主の使いが

ルカの福音書2章9節「すると、主の使いが彼らのところに来て、主の栄光が回りを照らしたので、彼らはひどく恐れた。」
Luke 2:9 And, lo, the angel of the Lord came upon them, and the glory of the Lord shone round about them: and they were sore afraid.

ここでバイオリンの音をよく聴きましょう。天国から地上にやってきた一人の天使の翼の羽音が、通常一台のバイオリンによって描写されています。

そして、羊飼いが天使を恐れたその時、翼の羽ばたく音は止まります。この天使は良い知らせを伝えにきましたが、羊飼いたちにとって生まれて初めて遭遇する出来事に動揺しないよう心を配っています。天使の知らせが伝えられると同時に、まるで凍りついたようにバイオリンの音が止まります。

17.　御使いは彼らに言った

ルカの福音書2章10−11節「御使いは彼らに言った。『恐れることはありません。今、私はこの民全体のためのすばらしい喜びを知らせに来たのです。きょうダビデの町で、あなたがたのために、救い主がお生まれになりました。この方こそ主キリストです。』」
Luke 2:10-11 And the angel said unto them, Fear not: for, behold, I bring you good tidings of great joy, which shall be to all people. For unto you is born this day in the city of David a Saviour, which is Christ the Lord.

輝かしい天使の声が、恐怖にかられている羊飼いたちに呼びかけます。この知らせは、誕生の告知としてはとても淡々としており、事実のみを伝えています。神の御子がお生まれになったという告知が、肉体労働者たちへの真夜中の知らせのみだったとは信じがたいことです。

この節でもう一つ注目すべき点は、このオラトリオの中で初めて、「キリスト」つまり「油注がれた者」というギリシャ語が使われていることです。しかし旧約聖書の古い約束はヘブル語で書かれています。ヘブル語では、この約束された救い主は「メシア（メサイア）」と呼ばれています。

18.　すると、たちまち

ルカの福音書2章13節「すると、たちまち、その御使いといっしょに、多くの天の軍勢が現われて、神を賛美して言った。」
Luke 2:13 And suddenly there was with the angel a multitude of the heavenly host praising God, and saying:

再び天使の羽ばたきが聞こえてきますが、先程よりも天使の数が増えています。それはオーケストラに匹敵する数です。御子の到来がどのような意味を持つのかを世界に告げる準備が進むにつれ、徐々にざわめきが聞こえてくるようです。

19.　栄光が、神にあるように

ルカの福音書 2 章 14 節「いと高き所に、栄光が、神にあるように。地の上に、平和が、御心にかなう人々にあるように。」
Luke 2:14 Glory to God in the highest, and peace on earth,good will towards men.

一人の天使の声に、他の天使たちの合唱が加わります。天使たちにさえ想像できないほど不思議な御業(みわざ)について歌っているのです。その内容は、堕落した人間への神の愛です。ペテロの手紙第一 1 章 12 節には、天の御使いたちが福音のメッセージとその奥義について深く知りたいと願っていることが記されています。

これは天使たちによる合唱であると同時に、神の子どもたちがクリスマスに喜びを持って歌う歌声でもあります。実際、キリスト教会はルカの福音書 2 章 14 節にある天使たちの歌を礼拝の式文に組み込んだほど、この歌を愛唱してきました。この歌はラテン語で『グロリア・イン・エクセルシス』として、ほぼ二千年にわたって礼拝の中で歌われ続けてきたのです。

天使の歌はあまりにも短かすぎます。バイオリンの音が一台ずつ消えていくのがわかります。時が満ち、天上の任務は達成され、素晴らしい喜びの知らせが告げられました。天使たちは天国へと戻っていくのです。

20.　大いに喜べ

ゼカリヤ書9章9−10節「シオンの娘よ。大いに喜べ。エルサレムの娘よ。喜び叫べ。見よ。あなたの王があなたのところに来られる。この方は正しい方で、救いを賜わり、この方は諸国の民に平和を告げる」
Zechariah 9:9-10 Rejoice greatly, O daughter of Zion; shout, O daughter of Jerusalem: behold, thy King cometh unto thee: he is the righteous savior and he shall speak peace unto the heathen.

春の晴れた朝、スズメやミソサザイなどの小鳥が、嬉しそうにさえずっているのを聞いたことがあるでしょうか。枝から枝に飛び移り、新しい一日の到来を告げます。この節は、まさにそのように歌われています。それは、遠い昔からの神の約束が実現する時がいよいよ来たからです。「*he shall speak peace unto the heathen* この方は諸国の民に平和を告げ」という部分で音楽が広がりを増します。救い主のメッセージは全ての人間のためのものなので、音も大きな広がりを持っているのです。

聖書には「この方は正しい方で、救いを賜わり、柔和で、ろばに乗られる。それも、雌ろばの子の子ろばに」(ゼカリヤ書9章9節)とあるように、この預言が、「王の中の王」がご自分の町に入場された棕櫚(しゅろ)主日に成就されたと記されています。

21.　そのとき、目の見えない者の目は開き

イザヤ書35章5-6節「そのとき、目の見えない者の目は開き、耳の聞こえない者の耳はあく。そのとき、足のなえた者は鹿のようにとびはね、口のきけない者の舌は喜び歌う。荒野に水がわき出し、荒地に川が流れるからだ。」
Isaiah 35:5-6 Then shall the eyes of the blind be opened, and the ears of the deaf unstopped.Then shall the lame man leap as an hart, and the tongue of the dumb shall sing.

マタイの福音書11章で、洗礼者ヨハネは、自分たちが待ち望んでいた救い主が本当にイエスなのかを直接尋ねるために、イエスの元へ弟子をおくりました。その答えとして、イエスはイザヤ書35章5-6節を29章18-19節と共に引用されました。

イエスは「はい、そうです」と単純にお答えになる代わりに、その答えの証拠を聖書の中から見つけるように彼らを導かれました。ジェネンズとヘンデルも『メサイア』の中で同様のことを行っています。自分の言葉でそれを伝える代わりに、聖書を通して神がイエスについて証言されるように私たちを導くのです。

ヨハネの福音書 20 章 30-31 節には「この書には書かれていないが、まだほかの多くのしるしをも、イエスは弟子たちの前で行なわれた。しかし、これらのことが書かれたのは、イエスが神の子キリストであることを、あなたがたが信じるため、また、あなたがたが信じて、イエスの御名によっていのちを得るためである」と書かれています。

22.　主は羊飼いのように、その群れを飼い

イザヤ書 40 章 11 節「主は羊飼いのように、その群れを飼い、御腕に子羊を引き寄せ、ふところに抱き、乳を飲ませる羊を優しく導く。」
Isaiah 40:11 He shall feed his flock like a shepherd: and he shall gather the lambs with his arm, and carry them in his bosom, and gently lead those that are with young.

ここで音楽は再び牧歌的になり、田舎に広がるなだらかな丘の穏やかな情景が思い浮かびます。これは私たちが信頼を置いている憐れみ深いキリストを表しています。

厳しい自然の中で傷つき、病に侵され弱りはて、心に恐怖を抱えて打ちひしがれた子羊たちはみな、緑の牧場と憩いの水辺に安全に導かれます。こうした子羊たちは「主は私のたましいを生き返らせ、御名のために、私を義の道に導かれます」(詩篇 23 篇 3 節)。

マタイの福音書11章28-29節「すべて、疲れた人、重荷を負っている人は、**彼**のところに行きなさい。**彼**があなたがたを休ませてくれます。**彼**は心優しく、へりくだっているから、あなたがたも**彼**のくびきを負って、**彼**から学びなさい。そうすればたましいに安らぎが来ます。」
Matthew 11:28-29 Come unto him, all ye that labour and are heavy laden, and he will give you rest. Take his yoke upon you, and learn of him; for he is meek and lowly of heart: and ye shall find rest for your souls.

聖書の中では、マタイの福音書 11 章 28-30 節はイエスの言葉です。ヘンデルの『メサイア』の中では、代名詞が一人称から三人称に変えられています。(「わたしのところに来なさい」come to ***me*** から「彼のところに行きなさい」come to ***him***) この結果、 救い主がご自身について話す代わりに、聖句が救い主について話すことになります。

この音楽は「来なさい(come)」という言葉をとても味わい深く扱っているように思えます。これは最高に優しい招きの言葉です。どんなに臆病で、罪悪感に満ち、打ちひしがれた魂さえも神のもとに引き寄せるための招きです。そこには、救い主の懲らしめの声は聞かれません。そこにあるのは歓迎の声だけなのです。

23.　彼のくびきは負いやすく

マタイの福音書 11 章 30 節「**彼**のくびきは負いやすく、**彼**の荷は軽いからです。」
Matthew 11:30 His yoke is easy and his burthen is light.

この後、今やイエスに救われた人々の声を代弁する合唱が、確信に満ちた声で応えます。イエスを通して罪と死と悪魔の力から解放され、自由になった喜びを歌いあげるのです。

羊飼いである王のくびきは、私たちの生まれつきのくびきとは大きく違います。サタンのくびきは惨めで、家族を崩壊させ、自分たちの愚かな行動によってお互いを孤立させ、病を広げ、暴力やテロや戦争で血を流させます。

神に感謝を捧げましょう。私たちの救い主のくびきは負いやすく、荷は軽いのです。英語では、歌いやすくするために重荷(burden)に対応する古語のburthenが使われています。

ここでオラトリオの第 I 部が終わります。第 I 部は神に属する人々への神の慰めに満ち

た約束で幕を開け、その約束が成就されることで幕を閉じます。私たちの弱りきった肩にのしかかっていた罪と恥のくびきや恐れや絶望、悲しみや死などは取り払われたのです。

しかし、そのくびきはどこに行き、どうなったのでしょうか。第Ⅱ部では、くびきを私たちの背中から取り除き、ご自分で背負ってくださった方の、絵画的で愛に満ちた描写を見ることになります。

『メサイア』が舞台で上演されるときは、習慣としてここで演奏者たちが休憩を取ることになっています。これを読んでいるあなたも、ぜひ休憩を取ってください。ヘンデルの時代には、ヘンデル自身がこの休憩の間に、オルガン曲（オルガン協奏曲第２番変ロ長調 Op. 4-2）を演奏していました。

第Ⅱ部

24.　見よ、世の罪を取り除く神の小羊

ヨハネの福音書１章 29 節「見よ、世の罪を取り除く神の小羊。」
John 1:29 Behold the Lamb of God, that taketh away the sin of the world.

第Ⅱ部は第Ⅰ部と同様、洗礼者ヨハネの言葉で始まります。今回ヨハネは人々の注意をキリストに向けさせます。

第Ⅱ部でも、人々の声を代弁する形で合唱が始まります。第Ⅰ部で聞いた喜ばしい歌声の代わりに、ここでは暗い歌声が、この世の罪のためのあがないの代価について語りかけます。第Ⅰ部の終わりの喜びに満ちた音色は、私たちがイエスの死によって自由の身になったという暗い現実を語る声にとって変わるのです。

25.　彼はさげすまれ、人々からのけ者にされ

イザヤ書53章3節「彼はさげすまれ、人々からのけ者にされ、悲しみの人で病を知っていた。」
Isaiah 53:3 He was despised and rejected of men; a man of sorrows,and acquainted with grief.

ゆっくりと秩序立ったメロディーが私たちをゲッセマネの園からイエスが連行された

四つの裁きの場所に導きます。移動するに従って、イエスへの仕打ちはむごさを増していきます。

この部分は重く感じるかもしれません。また、とても長いので早く次に進んでしまいたくなるかもしれません。確かにここは『メサイア』のハイライトから外されることが多く、生演奏の場合もその長さのために省かれることがあります。

まさに、人間の性質とはこういうものではありませんか。イエスの苦しみと死から目を反らしたくなるのです。受難節の40日間、私たちは礼拝に出席しても「またイエスの苦しみについて聞かなければならないのか」と心の中でつぶやいてしまうことはありませんか。

ここで、音楽が激しさを増します。群衆がイエスの髪を引っ張り上げ、何度も何度も殴りつける様子をリズムで表しているのです。

イザヤ書50章6節「打つ者に**彼**の背中をまかせ、ひげを抜く者に**彼**の頬をまかせ、侮辱されても、つばきをかけられても、**彼**の顔を隠さなかった。」
Isaiah 50:6 He gave his back to the smiters, and his cheeks to them that plucked off the hair: he hid not his face from shame and spitting.

ここでまた聖書の言葉が変更されています。聖書の中の「私」の部分がここでは「彼」になっています。この部分を「彼」に変えることによって、メシアご自身は沈黙を保ったままになります。「彼は痛めつけられた。彼は苦しんだが、口を開かない。ほふり場に引かれて行く小羊のように、毛を刈る者の前で黙っている雌羊のように、彼は口を開かない」（イザヤ書53章7節）。

26.　まことに、彼は私たちの病を負い

イザヤ書53章4-5節「まことに、彼は私たちの病を負い、私たちの痛みをになった。だが、私たちは思った。彼は罰せられ、神に打たれ、苦しめられたのだと。しかし、彼は、私たちのそむきの罪のために刺し通され、私たちの咎（とが）のために砕かれた。彼への懲らしめが私たちに平安をもたらし、彼の打ち傷によって、私たちはいやされた。」
Isaiah 53:4-5 Surely he hath borne our griefs, and carried our sorrows: he was wounded for our transgressions, he wasbruised for our iniquities: the chastisement of our peace was upon him; and with his stripes we are

healed.

信者が自分たちの罪を告白する合唱が再び聞こえてきます。「まことに(Surely)」という言葉は、神の厳しい罰がイエスを押しつぶすように歌われます。「まことに、彼は私たちの病を負い、私たちの痛みをになった」という歌詞はとても重苦しい雰囲気で始まりますが、最後の方で少しだけ明るくなります。重荷が少し軽くなったのです。

「彼の打ち傷によって、私たちはいやされた」という歌詞の手前の間(ま)に注意して聴いてください。あたかも、むち打ちの執行人が、イエスの背中にむちを振り下ろそうと腕を上げた瞬間のようです。同じ歌詞が何度も繰り返され、イエスが兵士に背中を何度もむちで打たれた聖書の場面を思い出させます。

27.　私たちはみな、羊のようにさまよい

イザヤ書 53 章 6 節「私たちはみな、羊のようにさまよい、おのおの、自分かってな道に向かって行った。しかし、主は、私たちのすべての咎を彼に負わせた。」
Isaiah 53:6 All we like sheep have gone astray; we haveturned every one to his own way; and the LORD hath laidon him the iniquity of us all.

合唱はさらに歌い続けます。楽しく歌いやすい旋律で、無意識に音楽に合わせて足でリズムを取ってしまいそうです。これは、私たちが意識せずに神の保護の内から迷い出て、罪の中へと入りこんでしまうのとよく似ていませんか。聖パウロはこのことについて、ローマ人への手紙 7 章 18-19 節で、「私は、私のうち、すなわち、私の肉のうちに善が住んでいないのを知っています。私には善をしたいという願いがいつもあるのに、それを実行することがないからです。私は、自分でしたいと思う善を行なわないで、かえって、したくない悪を行なっています」と記しています。

実際、ここで音楽は愚かで浅はかな雰囲気を振りまいています。罪の愚かさを表しているのです。私たちは誰もが自分にとって害のある愚かなものに惹きつけられ、害があると分かっていながらもそこに入り込んでしまいます。

しかしそこで合唱が「主は、私たちのすべての咎を彼に負わせた」と歌うと、その愚かな行為を表す楽しい旋律が終わります。私たちは愚かにも神の保護の元から迷い出てしまいました。人類を罪から救うという目的のために、神はその罪の代価をご自分の御子に負わせられたのです。

28.　彼を見る者はみな、彼をあざけります

詩篇22篇7節「**彼**を見る者はみな、**彼**をあざけります。彼らは口をとがらせ、頭を振ります。」
Psalm 22:7 All they that see him laugh him to scorn; they shoot out their lips, and shake their heads, saying:

聖書の言葉がここでもまた変えられています。聖書では「私を」となっていますが、ここでは「彼を」になっています。音楽の中で笑いやあざける声が聞こえてきます。この短い部分が、これから始まる救い主への侮辱的な場面を予想させます。

29.　主に身を任せよ

詩篇22篇8節「主に身を任せよ。彼が助け出したらよい。彼に救い出させよ。彼のお気に入りなのだから。」
Psalm 22:8 He trusted in God that he would deliver him; let him deliver him, if he delight in him.

また合唱が入ります。今度は群衆、つまり救い主イエスを信じず、十字架につけろと主張した人々の声です。メシアが全人類のために苦しみを受けていた時の彼らの態度は神を冒涜するものでした。イエスが十字架にかけられた金曜日に、宗教指導者たちは詩篇22篇を引用しながらイエスを侮辱しました。これは千年前の預言が、背筋が凍るほどの正確さをもって成就したことを示しています。

まるでイエスを取り囲んでいるかのように、合唱がいたるところから聴こえてくるのに注意してください。そして決定的なあざけりの言葉を浴びせようと声を合わせるのです。

ヘンデルが仕掛けた罠にかかってはいませんか。この部分もまた、リズムの良い、耳に残りやすい調子になっているのです。聴いている間、指やつま先でトントンとリズムを取ったり、一緒にメロディーを口ずさんだりしていませんでしたか。実際、罪についても同じことが言えます。神を信じる人々も、無意識に罪に同調してしまうのです。これこそ、私たちには救い主が絶対に必要であるということの証明です。

30.　そしりが彼の心を打ち砕き

詩篇 69 篇 20 節「そしりが**彼**の心を打ち砕き、**彼**は、ひどく病んでいます。**彼**は同情者を待ち望みましたが、ひとりもいません。慰める者を待ち望みましたが、見つけることはできませんでした。」
Psalm 69:20 Thy rebuke hath broken his heart; he is full of heaviness. He looked for some to have pity on him, but there was no man, neither found he any to comfort him.

「そしり」とは神のそしりです。神がそのひとり子を罰したのです。聖書には「神は、罪を知らない方を、私たちの代わりに罪とされました」(コリント人への手紙第二 5 章 21 節)と書かれています。ソリストの悲しげな歌声に耳を傾けてください。「いのちの水」であるキリストが、酸いぶどう酒の酸味を感じながら息絶えるのです。

ここでもまた原文の変更があります。聖書の中では、キリストご自身が十字架の上でどのような苦しみにあわれるのかが説明されています。詩篇 69 篇 20 節には「そしりが私の心を打ち砕き、私は、ひどく病んでいます。私は同情者を待ち望みましたが、ひとりもいません。慰める者を待ち望みましたが、見つけることはできませんでした」とあります。

31.　よく見よ、彼をひどいめに会わされたこのような痛みを

哀歌 1 章 12 節「道行くみなの人よ。よく見よ。**彼**をひどいめに会わされたこのような痛みがほかにあるかどうかを。」
Lamentations 1:12 Behold, and see if there be any sorrow like unto his sorrow.

また聖句の人称が変更されています。聖書の通りだと「道行くみなの人よ。よく見よ。主が燃える怒りの日に私を悩まし、私をひどいめに会わされたこのような痛みがほかにあるかどうかを」となっています。

罪は、その報いを受けなくてはなりません。神は恵みのうちに、ご自分の御子を全ての人間の罪を償う身代わりとされました。「キリストは人としての性質をもって現われ、自分を卑しくし、死にまで従い、実に十字架の死にまでも従われたのです」(ピリピ人への手紙 2 章 8 節)。

32.　生ける者の地から絶たれたことを

イザヤ書 53 章 8 節「しいたげと、さばきによって、彼は取り去られた。彼の時代の者で、だれが思ったことだろう。彼がわたしの民のそむきの罪のために打たれ、生ける者の地から絶たれたことを。」
Isaiah 53:8 He was cut off out of the land of the living: for the transgression of thy people was he stricken.

メシアの死の瞬間がやってきます。その時、ファンファーレは鳴り響きませんでした。ヨハネの福音書 19 章 30 節には「イエスは、酸いぶどう酒を受けられると、『完了した』と言われた。そして、頭を垂れて、霊をお渡しになった」と、淡々と書かれています。

この部分の最後は、曲調が少し早くなっていることに気づくかもしれません。これは、死が決して全ての終わりではないことを表しています。

33.　あなたは、彼のたましいをよみに捨ておかず

詩篇16篇10節「まことに、あなたは、**彼**のたましいをよみに捨ておかず、あなたの聖徒に墓の穴をお見せにはなりません。」
Psalm 16:10 But thou didst not leave his soul in hell; nor didst thou suffer thy Holy One to see corruption.

オラトリオはここで、神の死から、「ご自分の心にかなう人」ダビデ王に焦点を当てます。詩篇16篇でイエスはダビデ王の口を通して、死が勝利することはなく、死の状態がこの世を支配することはないと預言しておられます。

再び聖句の人称が変更されています。変更前の聖句では「まことに、あなたは、**私**のたましいをよみに捨ておかず、あなたの聖徒に墓の穴をお見せにはなりません」とあります。

メシアが、死と地獄に打ち勝ったと宣言する音楽は短いものです。ここでは、次の場面でのメッセージを準備しているのです。

34.　門よ、おまえたちのかしらを上げよ

詩篇24篇7-10節「門よ。おまえたちのかしらを上げよ。永遠の戸よ。上がれ。栄光の王がはいって来られる。栄光の王とは、だれか。強く、力ある主。戦いに力ある主。門よ。おまえたちのかしらを上げよ。永遠の戸よ。上がれ。栄光

の王がはいって来られる。その栄光の王とはだれか。万軍の主。これぞ、栄光の王。」
Psalm 24:7-10 Lift up your heads, O ye gates; and be ye lift up, ye everlasting doors; and the King of glory shall come in. Who is this King of glory? The LORD strong and mighty, the LORD mighty in battle. Lift up your heads, O ye gates; and be ye lift up, ye everlasting doors; and the King of glory shall come in. Who is this King of glory? The LORD of hosts: he is the King of glory.

先ほど合唱団は、迷える小羊のようにさまよい、イエスを十字架にかけよ、と侮辱する声を上げましたがここで救われます。「戦いに力ある栄光の主」をほめたたえるために声を合わせるのです。

この詩篇は、勝利を収めた戦いから戻ってきた王を描写しています。それはどんな戦いだったのでしょう。死とサタンと地獄の軍隊がメシアによって踏み砕かれたのです。これこそ、祝うべき本当の勝利です。

この部分は復活祭(イースター)の時期に当たります。多くの人がここで「ハレルヤ」コーラスを聞けると思うかもしれません。降臨節の場面で歌われなかったので期待が高まるのでしょうが、残念ながらまだ登場しません。先に伝えたいことがあるので、ヘンデルは「ハレルヤ」を後にとってあるのです。

35.　神は、かつてどの御使いに向かって

ヘブル人への手紙1章5節「神は、かつてどの御使いに向かって、こう言われたでしょう。『あなたは、わたしの子。きょう、わたしがあなたを生んだ。』」
Hebrews 1:5 Unto which of the angels said he at any time: Thou art my Son,this day have I begotten thee?

ここで『メサイア』は教義的になります。マリヤが生んだ子で、苦しみを受け、死に、よみがえったのは一体誰だったのでしょう。天使でしょうか。半神でしょうか。それともただの人間でしょうか。これまでにたくさんの人が様々な考えを示してきました。

ペテロとヤコブとヨハネは山の上でイエスの変貌、すなわち神の栄光に満ちた姿を目にしました。ルカによる福音書 9 章 35 節で父なる神が、「これは、わたしの愛する子、わたしの選んだ者である。彼の言うことを聞きなさい」とはっきり告げるのを聞いたので

す。ヘンデルはこの重要な真実を私たちに伝えています。イエスが神ご自身であることは、次の事実によって証明されています。神は天使のことを、ご自分の「子」として宣言したことは一度もないのです。

ここで使われている英語の「生む(begotten)」はとても古い表現ですが、キリスト教会では長く使われてきた単語です。これは神が、御父と御子の関係を説明するために使っておられる言葉です。これは他のどんな親子関係とも違います。どちらもまことの神であるので、同等の能力を持ち、共に永遠であり、同じ権威を持っておられます。死んでよみがえられた方はまことの神ですから、その死と復活は私たちにとって永遠に重要な意味を持つのです。

36.　神の御使いはみな、彼を拝め

ヘブル人への手紙１章６節「神の御使いはみな、彼を拝め。」
Hebrews 1:6 Let all the angels of God worship him.

ルカによる福音書2章に書かれている天の軍勢を思い出してください。彼らは御子の誕生の宣言を天高く歌い上げました。同じ天の軍勢が、今度はヘブル人への手紙１章6節で、罪と死と地獄に対して勝利された方に向かって賛美の声を上げるのです。

キリストの本質は、人間によって書かれた言葉や発言によってではなく、神の御言葉によってのみ明らかにされるという事実を、ジェネンズとヘンデルは気づかせてくれます。聖書で明らかにされているのは相対的な真実ではなく、絶対的な真実なのです。

37.　あなたは、いと高き所に上り、捕われた者をとりこにし

詩篇 68 篇 18 節「あなたは、いと高き所に上り、捕われた者をとりこにし、人々から、みつぎを受けられました。頑迷な者どもからさえも。神であられる主が、そこに住まわれるために。」
Psalm 68:18 Thou art gone up on high, thou hast led captivity captive,and received gifts for men; yea, even for thine enemies, that the LORD God might dwell among them.

『メサイア』はここで逆走するかのように変化し始めます。この物語は、キリストが私たちのためにお生まれになるという約束で始まりましたが、今度はキリストが天に昇られる場面に変わります。「あなたは、いと高き所に上り(Thou art gone up on high)」

という箇所で音階がどんどん上っていくところは、キリストが天に昇られる様子が目に浮かぶようです。

「いと高き所に上り」と説明されたメシアが、どのようにして私たちの世界に「住まわれる」のでしょうか。聖パウロは、詩篇 68 篇のこの部分を次のように説明しています。「この下られた方自身が、すべてのものを満たすために、もろもろの天よりも高く上られた方なのです」(エペソ人への手紙 4 章 10 節)。

メシアは、天に昇られ、あらゆる所に存在しておられます。神のこのような本質を「偏在」と言います。それはご自身の教会の益となるように神がすべてのことを治めてくださるためです。メシアは、私たちがいつの日か死からよみがえり天の御国に入れるよう、私たちの場所を備えるために天に昇られたのです。

38.　主はみことばを賜わる

詩篇 68 篇 11 節「主はみことばを賜わる。良いおとずれを告げる女たちは大きな群れをなしている。」
Psalm 68:11 The Lord gave the word; great was the company of the preachers.

合唱が再び始まります。この声は誰を象徴しているのでしょうか。天使の声、それとも神を信じる人々の声でしょうか。それは両者だと言えます。天使がメシアの成し遂げられた御業を高らかに宣言し、神に属する人々がその言葉を繰り返しているのです。

イエス復活後、数世紀の間、キリスト教は中東、アフリカ、小アジア(現在のトルコ)、ヨーロッパの地域に野火のように勢いよく広まりました。一つ前の詩篇68篇18節ではキリストの昇天を表していますが、ここではその10日後に起こったペンテコステ(聖霊降臨日)を思い起こさせます。

コーラスが「主はみことばを賜わる(The Lord Gave the Word)」と声を合わせて歌う所をよく聴いてください。すると、別のパートが「良いおとずれを告げる女たちは大きな群れをなしている(great was the company of preachers)」と続きます。良いおとずれを告げる者は牧師や祭司、宣教師や教師だけではなく、すべての信者を含みます。神は、控えめでおとなしい信者にも、素晴らしい御言葉を広く伝えるよう命じておられるのです。

39.　良いことの知らせを伝える人々の足は、なんとりっぱでしょう

ローマ人への手紙10章15節「良いことの知らせを伝える人々の足は、なんとりっぱでしょう。」
Romans 10:15 How beautiful are the feet of them that preach the gospel of peace, and bring glad tidings of good things!

「良いことの知らせを伝える人の足」というのは、聖書の中でよく使われている表現です。預言者ナホムはこう語っています。「見よ。良い知らせを伝える者、平和を告げ知らせる者の足が山々の上にある」(ナホム書１章 15 節)。これで「我が民を慰めよ」というはじめの言葉が成就します。つまり、神に遣わされた人々が福音による慰めを民に伝えるのです。

『メサイア』の上演によっては、イザヤ書52章7節と9節を合わせて合唱する場合があります。こちらが7節-9節の訳で、下線を引いた所が実際に歌われている内容です。

「良い知らせを伝える者の足は山々の上にあって、なんと美しいことよ。平和を告げ知らせ、幸いな良い知らせを伝え、救いを告げ知らせ、『あなたの神が王となる。』とシオンに言う者の足は。聞け。あなたの見張り人たちが、声を張り上げ、共に喜び歌っている。彼らは、主がシオンに帰られるのを、まのあたりに見るからだ。エルサレムの廃墟よ。共に大声をあげて喜び歌え。主がその民を慰め、エルサレムを贖(あがな)われたから。」

ここは、「大声をあげて喜べ」という題名になっていますが、省略されることもあります。ヘンデルは、生涯にわたって『メサイア』を編集し続けました。それと同様、現代でも選曲の過程で部分的に省かれることはよくあります。

40.　その声は全地に響き渡り

ローマ人への手紙10章18節「その声は全地に響き渡り、そのことばは地の果てまで届いた。」
Romans 10:18 Their sound is gone out into all the lands, and their words unto the ends of the world.

この素晴らしい伝道者たちはどこに遣わされたのでしょうか。四声全てが最初の歌詞を順番に歌います。そして最終目的地である「世界の果て(ends of the world)」に向かっ

て、最後に声を合わせて歌うのです。

私たちは今『メサイア』のあらすじのどこにいるのでしょうか。救い主が約束され、預言されました。救い主は人間の姿をとり、生き、苦しみ、死に、よみがえり、天国の王座につかれました。そして現在も神はこの話を世界中に伝えるように働いておられるのです。

41.　なぜ国々は騒ぎ立ち

詩篇2篇1-2節「なぜ国々は騒ぎ立ち、国民はむなしくつぶやくのか。地の王たちは立ち構え、治める者たちは相ともに集まり、主と、主に油をそそがれた者とに逆らう。」
Psalm 2:1-2 Why do the nations so furiously rage together, and why do the people imagine a vain thing? The kings of the earth rise up, and the rulers take counsel together, against the LORD, and against his anointed.

ヘブル人への手紙１章6節に書いてあるように、すべての天使が神を礼拝しているのに、人間がそうしないのはなぜでしょうか。神の言葉は世界に宣べ伝えられましたが、悲しいことに多くの国はそれを拒んでいます。

創世記には、地を満たせという神の命令に背き無意味な塔（バベルの塔）を建てようとする人々の話が記されています。ヘロデ王は生まれたばかりのメシアを抹殺しようとする虚しい計画を立てた、とマタイは書いています。イエスが十字架にかけられた朝、ユダヤ人は「カイザル（皇帝）以外に王はいない」と叫びました。これはすべて罪深い態度です。つまり、「我々は主と、主に遣わされた方を認めない」という態度です。

しかし、神への反抗は無益です。バイオリンが「この方は、精練する者の火」の部分を表現していたように、ここでも楽器の演奏が、神に遣わされた救い主に逆らう激しい行動を表しています。最終的にはすべてが徒労に終わります。主は、言葉を混乱させてバベルから人々を追い払われました。また、幼子イエスを殺そうとしたヘロデ王の計画をいとも簡単に失敗させ、不信仰であったエルサレムを紀元後70年に滅ぼされました。聴いているうちに、音楽の対比が浮かび上がってくるはずです。ソリストの落ち着いた声と、楽器の奏でる騒がしい音色が、なんと対照的なことでしょう。

42.　彼らのかせを打ち砕き

詩篇2篇3節「さあ、彼らのかせを打ち砕き、彼らの綱を、解き捨てよう。」
Psalm 2:3 Let us break their bonds asunder, and cast away their yokes from us.

渡り鳥は毎年同じ時期に飛び立ち、同じ時期に戻ってきます。荒々しい海は神の一声で静まります。星さえも決まった軌道に沿って動きます。他の被造物は忠実に神の定めに従っているにもかかわらず、悲しいことに、人間だけが神に逆らってもよいと考えています。

王や支配者やこの世の有力者たちの声を代弁している合唱を聴いてください。彼らは神とメシアに対する反抗をあからさまに誇っています。この合唱は、人間の古い本質が神の義なる律法をあざけっている様子を表しています。

残念なことに、こうしたこの世の勢力は、「**彼**のくびきは負いやすく、**彼**の荷は軽い」ことを知らないのです。

43.　天の御座に着いておられる方は笑う

詩篇2篇4節「天の御座に着いておられる方は笑う。主はその者どもをあざけられる。」
Psalm 2:4 He that dwelleth in heaven shall laugh them to scorn: the Lord shall have them in derision.

こうした反抗や反逆に対する神の最初の反応は簡潔です。神はその計画をあざ笑っておられるのです。「笑う(Laugh)」という言葉が本当に笑っているように歌われています。しかし神の答えは単なるあざけりでは終わりません。「『悪者どもには平安がない。』と私の神は仰せられる」(イザヤ書 57 章 21 節)のです。

44.　あなたは鉄の杖で彼らを打ち砕き

詩篇 2 篇 9 節「あなたは鉄の杖で彼らを打ち砕き、焼き物の器のように粉々にする。」
Psalm 2:9 Thou shalt break them with a rod of iron; thou shalt dash them in pieces like a potter’s vessel.

神がご自身に対する反抗をあざ笑われる一方で、その反抗への報いは笑い事ではすみま

せん。この部分では怒りの音色が聴こえてきます。復讐心に満ちた音楽と言葉です。メシアを拒否することで彼らは自分たちの運命を決定づけてしまったのです。
多くの人や国が、歴史の中で神の意志に背いて滅びていきました。サウル王、アハブ王、ネブカデネザル王、ソドムとゴモラ、パロの軍隊、ヒッタイト人、アモリ人、ペリシテ人、北イスラエル国など。これらはすべて滅びましたが、主と、主に油注がれた者(メシア)は今も生きておられます。

45.　ハレルヤ

黙示録 19 章 6 節「ハレルヤ。万物の支配者である、われらの神である主は王となられた。」
Revelation 19:6 Hallelujah: for the Lord God omnipotent reigneth!

神の救いの約束は成就され、サタンのもくろみにも関わらず、神の福音は世界中に広められました。今こそ主イエスによって勝ち取られた勝利の歌を歌い上げる時です。

黙示録は、この歌が天国にいる聖徒たちによって歌われていることを教えています。救われた魂は神を褒め称えます。悪魔、罪深いこの世、そして自分自身の反抗的な性質にも関わらず、彼らは神の恵みによって天国に入ることができたのです。神はこの世の全ての罪よりも強いのです。「主は私の味方。私は恐れない。人は、私に何ができよう」(詩篇 118 篇 6 節)。

黙示録 11 章 15 節「この世の国は私たちの主およびそのキリストのものとなった。主は永遠に支配される。」
Revelation 11:15 The kingdom of this world is become the kingdom of our Lord, and of his Christ; and he shall reign for ever and ever!

ヘンデルは、黙示録 11 章 15 節をここで用いることによって、ヘンデル以前に活躍した一人の音楽家に敬意を払っています。1600 年代初めに、フィリップ・ニコライというルター派の牧師が『起きよ、エルサレム、時こそ来たれり(Wake, awake for night is flying)』(教会讃美歌 137 番/聖文社)という曲を作詞作曲しました。ヘンデルは、ニコライが作曲したメロディーに敬意を払って「ハレルヤ」コーラスの中でそれを使っています。合唱団が歌う「この世の国は…キリストのものとなった(The kingdom of this world is become)」という部分は、ニコライが書いた讃美歌の 1 番の中の「花婿なり(The Bridegroom comes, awake!)」という部分の旋律と同じです。また、「ハレルヤ」の「主は

永遠に支配される(and he shall reign forever and ever)」という箇所は、同じく1番に出てくる「主を迎えまつれ(to meet the Bridegroom, who is near)」と同じ旋律です。

なぜヘンデルは、ここでニコライの歌詞を思い起こしてもらいたいのでしょうか。それはキリストが、天の王座にお着きになった後も、大切な花嫁である教会を迎える準備をなさっているからです。
メシアは『メサイア』の中で、実に様々な名前で呼ばれています。主の栄光、国々の望み、契約の使者、救い主、素晴らしい指導者、偉大な神、永遠の父、平和の君、主なるキリスト、義なる救い主、神の小羊、聖なる方、栄光の王、わたしの子、そして神に油注がれた者、などです。

黙示録19章16節「王の王、主の主。」
Revelation 19:16 KING OF KINGS, AND LORD OF LORDS.

ここでさらに二つの名前を付け加えることができます。「王の王」と「主の主」です。これは強調するための言い方ではありますが、決して誇張ではありません。この世で最も偉大と思われている王を思い浮かべてください。この世界でもっとも力のある君主について考えてみてください。「王の王」「主の主」とは、王や主と呼ばれる者の中で最も優れた者、または真の王、真の主という意味で、キリストはまさしくそのような王であり、主であるのです。この合唱部分は、神の素晴らしい御名を歌い上げることを心から喜んでいるように聴こえます。叫んでいるのではなく、勇敢に告白しているのです。

『メサイア』が最初にロンドンで英国王ジョージⅡ世のために上演された時、誰かが「ハレルヤ」の演奏の間に立ち上がりました。立ち上がった最初の人物がジョージⅡ世だったかどうかについての見解は分かれますが、英国民は国王が立ち上がっているのを見て、自らも立ち上がりました。その夜から「ハレルヤ」の演奏の間中、聴衆が立ち上がることが慣習となりました。あなたも『メサイア』の演奏会に行く機会があれば、観客がそうする場面に遭遇することでしょう。あなたが座ったままだと、逆に目立ってしまうかもしれません。

なぜジョージⅡ世は立ち上がったのでしょうか。ただ座っているのに疲れたからでしょうか。それとも、キリスト教徒としての敬虔な気持ちからでしょうか。つまり、自分よりもはるかに偉大な王に対する謙虚さをもって立ち上がったのでしょうか。私たちも『メサイア』の演奏中や、礼拝の中で立ち上がることがあるでしょう。その理由が単に慣習だからということではなく、私たちの偉大な王の中の王に対する、感謝に満ちた愛の心から出る行為であることを祈っています。

キリストが地獄、罪、そして死に対する勝利者であるなら、なぜ神の子どもである私たちは死ななければならないのでしょうか。ニコライ牧師は『起きよ、エルサレム』の讃美歌を制作中に同じ疑問と格闘しました。ドイツのウンナ郡にはニコライ師の書斎が保存されています。そこからは当時一日に30人もの埋葬が行われていた墓地を今も見渡すことができます。ニコライ師の讃美歌は死に直面した際も、彼が「王の王」の約束を固く信じていたことを明らかにしています。イエスは、神に属する人々のためにもう一度戻って来られることを約束しています。イエスはよみがえられました。ですから、その約束は必ず実現することが分かります。『メサイア』の第Ⅲ部では、この約束についてもっと詳しく見ていきます。

第Ⅱ部は「ハレルヤ」で幕を閉じます。神のご計画が実現したことを世界中の人々が聞くという広い視点から、第Ⅲ部では、神が私たち一人ひとりの人生の中でなさったことの重要性に焦点が移っていきます。

ヘンデルが『メサイア』を作曲し、1742年にアイルランドのダブリンで初演した時は、「ハレルヤ」の演奏後に短いオルガン独奏会が開かれました。楽器演奏者、合唱団、ソリストがステージから降りてしばし休憩を取る間、ヘンデルがオルガンの前に座って演奏をしたのです。その時の楽曲は、シャコンヌ　ト長調(G.229)です。

第Ⅲ部

46.　私は知っている。私を贖う方は生きておられ

ヨブ記 19 章 25-26 節「私は知っている。私を贖う方は生きておられ、後の日に、ちりの上に立たれることを。私の皮が、このようにはぎとられて後、私は、私の肉から神を見る。」

Job 19:25-26 I know that my redeemer liveth, and that he shall stand at the latter day upon the earth: And though worms destroy this body, yet in my flesh shall I see God.

救い主がその仕事を終え、恵みの王国を支配しておられる今、私たちには天国に行くという確かな希望があります。音楽は優しく、強く、そして確信に満ちた曲調でそれを表わし、歌詞は私たちの肉体の復活の様子を述べています。

この言葉はヨブの美しい告白です。ヨブのこの世の生活はとても苦しいものでしたが、救い主と復活について確信を持っていました。その二千年後にお生まれになった救い主が、マルタに向かって「わたしは、よみがえりです。いのちです。わたしを信じる者は、死んでも生きるのです。また、生きていてわたしを信じる者は、決して死ぬことがありません。このことを信じますか」(ヨハネの福音書 11 章 25-26 節)と語りかけました。

コリント人への手紙第一 15 章 20 節「しかし、今やキリストは、眠った者の初穂として死者の中からよみがえられました。」

1 Corinthians 15:20 For now is Christ risen from the dead, the firstfruits of them that sleep.

ここでパウロが確信を持って口を開きます。私たちの戦いは勝利に終わり、今やすべてが安全です。肉体が必ず復活することについての揺るぎない告白を、音楽が表現しています。ここは多くの場合ソプラノ歌手が歌います。そして兄弟を失った悲しみの中でマルタがおこなった信仰告白を思い起こさせるのです。「マルタはイエスに言った。『私は、終わりの日のよみがえりの時に、彼がよみがえることを知っております』」(ヨハネの福音書 11 章 24 節)。

ヨブとマルタの告白はとても美しいものです。悲しみの中にあっても、神の言葉に堅く立ち続けたのです。神の約束こそが二人の希望の源でした。私たちは死や腐敗に取り囲まれていますが、永遠に生き続けることができるというイエスの約束があるのです。

この部分でヘンデルは、ヨブとパウロの言葉と、平和で確信に満ちた神の最後の約束を重ね合わせています。

47.　死がひとりの人を通して来たように

コリント人への手紙第一 15 章 21-22 節「というのは、死がひとりの人を通して来たように、死者の復活もひとりの人を通して来たからです。すなわち、アダムにあってすべての人が死んでいるように、キリストによってすべての人が生かされるからです。」

1 Corinthians 15:21-22 Since by man came death, by man came also the resurrection of the dead. For as in Adam all die, even so in Christ shall all be made alive.

全ての信者の集まりを象徴する合唱がここで加わります。前の部分で聴いた、悲しみの中にある一人の信者の信仰告白を、神に属する全ての信者の告白として用いているのです。

合唱団が歌っているのをよく聴いてみてください。アダムの死について歌われる時は暗い音色で歌われています。しかし、キリストによって勝ち取られた復活に対する信仰は、抑えきれません。それは突如、確かな喜びの歌声として溢れ出ます。

上記の聖句は聖書の全体像を集約したものです。世の初めに神に禁じられた果実を食べてしまったアダムの罪は、全ての被造物に死の呪いをもたらしました。そして何千年も後に、約束されたメシアが犠牲となって死に打ち勝ち、よみがえられたことによってその呪いが解かれたのです。神の律法はイエスによってすべて成就され、福音(よい知らせ)が残されました。

48.　私はあなたがたに奥義を告げましょう

コリント人への手紙第一 15 章 51-52 節「聞きなさい。私はあなたがたに奥義を告げましょう。私たちはみなが眠ってしまうのではなく、みな変えられるのです。終わりのラッパとともに、たちまち、一瞬のうちにです。ラッパが鳴ると、死者は朽ちないものによみがえり、私たちは変えられるのです。」

1 Corinthians 15:51-52 Behold, I tell you a mystery; We shall not all sleep, but we shall all be changed, In a moment, in the twinkling of an eye, at the last trumpet:

「聞きなさい(Behold)」と男性のソリストが、私たちに秘密を明かすようにゆっくりと歌い出します。しかし先ほどの合唱と同様、この男性はもはや秘密を隠しきれず、喜びではち切れんばかりに歌います。ヘンデルは、この男性がよい知らせを早く伝えたくて仕方がない様子をまるで転がるように歌わせています。

「ハレルヤ」コーラスの中での特別な場合を除いて、メサイアの中でトランペットはほとんど使われてきませんでした。ヘンデルは、次の部分のためにあえてそうしておいたのです。

49.　終わりのラッパとともに

コリント人への手紙第一 15 章 52-53 節「終わりのラッパとともに、たちまち、一瞬のうちにです。ラッパが鳴ると、死者は朽ちないものによみがえり、私た

ちは変えられるのです。朽ちるものは、必ず朽ちないものを着なければならず、死ぬものは、必ず不死を着なければならないからです。」

1 Corinthians 15:52-53 The trumpet shall sound, and the dead shall be raised incorruptible,and we shall be changed. For this corruptible must put on incorruption, and this mortal must put on immortality.

「ラッパが鳴ると(The trumpet shall sound)」という部分は、トランペットと共に歌われます。それは、全世界に響き渡る最後のラッパの音です。私たちはそれと同時に、私たちを愛してくださる方の声を聞きます。その方は、眠りについた死者の体を不死の体へと変えてくださり、弱った不完全な体を完全で栄光に満ちた体に変えてくださるのです。

この長い部分を聴いている間に、色々と思いめぐらすことができるでしょう。自分が犯してきた罪、恥、過去の過ち、よい行いをしたくてもできなかったことなどです。人生の中で経験した様々な試練や悩みは、あなたを疲れさせたことでしょう。そして、自分の愛する者の墓の前で味わうような悲しみも同様です。私たちには、ある日「ラッパが鳴り」全てのものが過去になる、という約束があります。だからこそ、キリスト教会はいつでも「主イエスよ、あなたの来臨を待ち望みます」と祈るのです。

50.　みことばが実現します

コリント人への手紙第一 15 章 54 節「しかし、朽ちるものが朽ちないものを着、死ぬものが不死を着るとき、『死は勝利にのまれた。』としるされている、みことばが実現します。」

1 Corinthians 15:54 Then shall be brought to pass the saying that is written, Death is swallowed up in victory.

このトランペットの音が、たったひと言で死者をよみがえらせる力を持つ救い主の言葉として響きわたる時、私たちは初めて「死は勝利に飲まれた(death is swallowed up in victory)」という意味が分かります。死と腐敗は「王の王」である神にとって障害にはならないのです。メシアはご自分に属する全ての民を、まるで眠りから起こすように簡単に生き返らせることがおできになります。

51.　死よ、おまえのとげはどこにあるのか

コリント人への手紙第一 15 章 55-56 節 「死よ。おまえの勝利はどこにあるのか。死よ。おまえのとげはどこにあるのか。死のとげは罪であり、罪の力は律法です。」

1 Corinthians 15:55-56 O death, where is thy sting? O grave, where is thy victory? The sting of death is sin; and the strength of sin is the law.

第Ⅱ部で、合唱団がメシアをあざける群衆を代弁して「主に身を任せよ。彼が助け出したらよい。彼に救い出させよ」と歌ったのを覚えていますか。今度は死があざけられる番です。一度は死によって捕らえられていた者たちが、逆に死をあざ笑うのです。以前は死の奴隷だった人々は、今や「小羊の血…のゆえに彼に打ち勝った」(黙示録 12 章 11 節)のです。

52. しかし、神に感謝すべきです

コリント人への手紙第一 15 章 57 節「しかし、神に感謝すべきです。神は、私たちの主イエス・キリストによって、私たちに勝利を与えてくださいました。」

1 Corinthians 15:57 But thanks be to God, who giveth us the victory through our Lord Jesus Christ.

前の部分のあざ笑いは収まっていき、喜びにあふれた祝福の合唱が加わります。死が勝利に呑まれたことをソリストたちが宣言するのを、合唱団はそばで聴いていました。そして、もはや神に属する人々が死によって引き裂かれないことを神に感謝し、一斉に歌い始めます。

キリストへの信仰があれば、歌の上手下手に関わらず、いつの日かこの合唱団に加わることができるでしょう。その日、すべての涙は拭われ、離れ離れになっていた愛する者たちやキリストの信仰のうちに死んだ全ての人々と共に声を合わせる事ができます。そして一緒に「私たちに勝利を与えて」くださった方に向かって喜びの歌を歌うのです。

53. 神が私たちの味方であるなら

ローマ人への手紙 8 章 31、33-34 節「神が私たちの味方であるなら、だれが私たちに敵対できるでしょう。神に選ばれた人々を訴えるのはだれですか。神が義と認めてくださるのです。罪に定めようとするのはだれですか。死んでくださった方、いや、よみがえられた方であるキリスト・イエスが、神の右の座に着き、私たちのためにとりなしていてくださるのです。」

Romans 8:31, 33-34　If God be for us, who can be against us? Who shall lay anything to the charge of God’s elect? It is God that justifieth. Who is he that condemneth? It is Christ that died, yea rather, that is risen again, who is at the right hand of God, who makes intercession for us.

私たちが、姦淫の罪で責められた女性の話(ヨハネの福音書 8 章 3-11 節)を読む時、自分の姿を重ねることができます。彼女が神に対して罪を犯したのと同様、私たちの神に対する罪も明らかです。この女性はいつ殺されてもおかしくありませんでした。それと同じく、私たちを自分の罪の中にとどまらせ滅びにいたらせることも、神にとって簡単なことなのです。

しかし、神はあわれみ深い方です。イエスは姦淫の罪を犯した女性をかばわれました。神が味方してくださっているのですから、誰が彼女の敵になりえるでしょうか。同じようにイエスは私たちのためにも仲介役をしてくださいます。義なる神の子イエスが罪深い人間を弁護してくださるのですから、誰が私たちを責めることができるでしょう。

もはや、神から私たちを引き離せるものは何もありません。神は私たちを罪から救い出し、義と認めてくださいました。そのおかげで、私たちは神と共に永遠の幸福の中で過ごすことができるのです。

54.　ほふられた小羊は

これですべてが完了しました。イエスが十字架にかけられた聖金曜日に、神殿の最も聖なる場所とイスラエル人を隔てていた幕が真っ二つに裂けました。それと同時に、限られた時間と永遠、罪深い人間と聖なる神、それぞれを隔てる壁も崩れ去ったのです。今や私たちは神の聖所、つまり天国に何の障害もなく入ることができるのです。

次の『メサイア』の歌詞は、最後の日のラッパが実際に鳴り響く時、すべてのクリスチャンが歌うことのできるものです。黙示録には、天国には聖歌隊がおり、ガラスの海の前で救い主の周りに集まって次のような賛美を捧げると書かれています。

黙示録 5 章 12-13 節「ほふられた小羊は、力と、富と、知恵と、勢いと、誉れと、栄光と、賛美を受けるにふさわしい方です。御座にすわる方と、小羊とに、賛美と誉れと栄光と力が永遠にあるように。」

Revelation 5:12-13 Worthy is the Lamb that was slain, and hath redeemed us to God by his blood, to receive power, and riches, and wisdom, and strength, and honour, and glory, and blessing. Blessing, and honour,

glory, and power, be unto him that sitteth upon the throne, and unto the Lamb forever and ever.

この歌詞は最初にソプラノ、アルト、テノール、バスの四声全てで歌われます。次に各パートに分かれ、喜びに溢れながら言葉を転がして遊んでいるように歌います。そして最後の「永遠にあるように(forever and ever！)」のところで全ての声が一緒になるのです。

もはや、痛みも苦しみも、涙も悲しみもありません。恥や悪、愚かな行ないや利己的な振る舞いの結果に苦しむこともありません。戦争、癌、疫病、そして死。このようなものとは、永遠にお別れです。その代わりに、私たちには平安、健康、喜び、ゆるし、愛、そして命が永遠に与えられるのです。

55.　アーメン

「アーメン(Amen)」という言葉は「確かにそうです」、つまり「信頼できる」「変わらない」「真実だ」という意味です。ここでは、信仰告白として扱われています。ジェネンズとヘンデルは、『メサイア』を単なる仕事として制作したのではありません。二人はこの歌の一言一句を心から信じていたのです。ジェネンズが選び出しヘンデルが旋律をつけた聖書の言葉そのものが彼らの希望でした。

あなたが今まで聴いてきたその聖書の言葉は全て真実で、いつか必ず実現します。むしろ、実現しないことがあり得るでしょうか。主ご自身がそう言われたのです。合唱団は、「アーメン」という確信に満ちた最後の言葉を、3 分以上も味わい深く歌い上げます。「アーメン」を永遠に言い続けたいかのようです。主の来られるその日まで、私たちは忍耐強く待ち続けなければいけないのです。

主イエスが再び来られる日を待ち望んでいる状態で『メサイア』が終わったということは、私たちがこの世に生きていてまだ天国に着いていないことの証しです。この世での幸福な時間はいつか終わりを迎えます。しかし天国では終わることがないのです。上演後、オーケストラ、ソリスト、合唱団、指揮者に別れを告げる時に、観客の多くは涙を流します。そして『メサイア』という史上最高の希望の歌をいつか再び聴くことができますように、と願うのです。

「主イエスよ、来てください。主イエスの恵みがすべての者とともにあるように。アーメン」(黙示録 22 章 20-21 節)。

Messiah – The Greatest Sermon Ever Sung （『メサイアー史上最高の希望の歌』)の翻訳出版プロジェクトは、2017 年のマルティン・ルター宗教改革 500 周年を記念して、Multi-Language Publications の支援によって行われています。このプロジェクトが日本、および、アジア各国の伝道の助けになるよう、どうぞお祈りください。

2017 年 7 月

MLP JAPAN（多言語文書委員会）

Multi-Language Publications

Multi-Language Productions
Bringing the Word to the World
MLP Catalog No: 38-5428
MLP Catalog No: 385428

本書はの「メサイアを味わう会」のために編集・印刷されたものです。
一部または全部の無断コピーをされないよう、お願い致します。